

フレーベル以後の幼稚園



— < 9 > —

津 守 真

新教育の進展

前号に述べたように、恩物論をめぐる細かい哲学的論争はここでは深く立ち入らないことにして、「進歩派」が勝利を占めて、その基礎を確立するに至る概略を追ってみよう。

一九〇三年、国際幼稚園連盟の三人委員会すなわち、保守派の代表者であるスザン・ブロー、同連盟の会長であるアリス・パトナム、進歩派を代表したルーシー・フィロロックは「幼稚園の理論と実際に関して現存する意見の相異点と、又同時に一致点とをもっと明確にするために、現在の幼稚園の恩潮を整理する目的をもって」(註一)十五人委員会を構成するように、同連盟より委嘱を受けた。この委員会は、進歩派、保守派両陣営より、代表的なキンダーガルトナーとみなされる人々により構成され、スザン・ブローを委員長とし、パティ・ヒルも含まれていた。(後に更に四人が加えられて、十九人委員会として知られている。)そこで幼稚園における材料、教育法、計画等をめぐって、両派よりいろいろの意見が交された。一九〇六年及び一九〇八年の会合において、委員会は究極的な論題として、「所謂幼稚園二学派間の基本的相異——フレーベル理論の種々の解釈における本質的相異について」という題目をとりあげた。両年にわたって、各委員の意見と議論が交されて後に、三つの立場、すなわち、「保守派」「進歩派」及び「保守—進歩派」を代表する三人の指

導者に、それぞれの立場より報告書を作成することが求められた。その三人は、スザン・ブロー、パティ・ヒル、ルーシー・フィロックであった。一九一〇年にその報告が行なわれ、「幼稚園」という名で出版され、各々の立場が明確に述べられた。それは相互にその立場を尊重した、穏当なものであり、「将来、更により大きな総合へと向うであろう」ということが付け加えられているが、十年以上に亘って続けられた二派の論争は、これでほぼ結末に達し、実際には進歩派の意見が公衆の認めるところとなつて、勝利を占めたのである。

進歩派の意見、すなわち新教育の主張はそれから急速に幼稚園の間に拡がってゆき、幾年も経ずして伝統的フレイベル主義は旧教育の代表とみなされる程になつた。そしてこの伝統的フレイベル主義に更に終止符を打つたのは、恐らくウイリアム・キルバトリックの「フレイベルの幼稚園原理——その批判」であろう。(註二)一九一六年に出版された此の書物は、フレイベルの理論と恩物を徹底的に批判して後、すべての象徴主義と恩物とは幼稚園から駆逐されるべきであることを唱え、幼稚園の書棚からフレイベルの書物は取り去つてしまふべきであるとしたのである。それは上に述べてきたような当時の幼稚園の状態から見れば、当然の成行きであつたと云えよう。そしてその主張は全面的に受けいれられ、進歩主義は徹底的な勝利を占めて、幾年も経ずして若い幼稚園教師たち

は、フレイベルの名も知らず、恩物を見たこともないというような状態になつたのである。

だが、ここで注目しておかなければならないことは、この間を通じて否定されたのは、フレイベルの象徴主義であり、恩物であり、後世の彼の追隨者たちの幼稚園教育の實際であつたということである。彼の象徴主義や恩物は現代からみれば全く非合理的で、馬鹿げたものであるし、当時の幼稚園の實際は、形式的であり、大人中心のであり、子どもの発達に關する考慮を欠き、自由を欠いていたものであつたらう。しかし、幼稚園の草創期にあつて、あれ程に多くのすぐれた人の関心をひき、彼らをひきつけたものは、今ここで批判されたようなものではなかつたらうと思ふ。ここで批判された以外に、もっと他の魅力がフレイベルの幼稚園にはあつたに違いない。

前掲のウイリアム・キルバトリックも、手厳しくフレイベルを批判しながら、他方において、フレイベルが「教育活動によつて、子どもたちがいかに幸福になりうるかを、幼稚園を通して世界に示したことは、忘れることのできない足跡である」として、幾つかの彼の長所を示していることは見逃してはならないだらうと思ふ。誰よりもフレイベルは子どもの個性を重んじた。その点ではルソーもペスタロッチも彼に及ばないのである。キルバトリックがフレイベルの功績とし

て挙げているものの一つは、自発活動の尊重である。自発活動は児童の遊びに最も自然に表現される。キルパトリックは此の点について、「フレイベルの人の教育にあらわれた遊びの諸文章ほど魅力的なものはないであろう。彼が幼稚園を考案したときに、もしもこの初期の美くしい見解から離れることがなかったなら」と嘆じ、後の恩物がそこから遠く距たることを悲しんでいる。彼のこの評価は正しいと思う。このフレイベルの自発活動の論は、後の新教育の自己表現の考え方の先駆をなしているものである。更にキルパトリックはフレイベルの功績として、芸術、園芸を教育に導入し、書物によらない教育を打ち立て、それによって暗誦的主知主義を廃したことを挙げている。これも後の新教育の主張の先駆をなすものと見てよからう。

さて、こうしてみるとときに、伝統的フレイベル主義幼稚園が批判されて、幼稚園の改革運動が起ったとき、実はそれはフレイベルの根本的主張にもどることを意味したことに他ならないのではないだろうか。彼の教育方法はもはや古く、時代の試練に耐えぬものであった。むしろその些末の部分をはなれて、素直にフレイベルを解釈したところから近代的に出発しなおしたものが「進歩派」の主張であったと逆説的に云うことができそうである。子どもがただ上から与えられたものを機械的に反復してゆくのが学校ではない。学習はもっと

生活に直接結びついたものであり、子どものひとりひとり喜びをもって、積極的になしてゆけるものでなければ本当ではないとした新教育の考えは、フレイベルの企図したもの、初期の幼稚園で、あの「サニーブルック農園レベカ」の著者ケート・ウィギンスなどが勇敢になしとげようとしたものと同じであると考えてもよいだろう。むしろその途中にはさまざまな偏狭な恩物主義、フレイベル主義こそが誤まっていたのである。

キルパトリックは、前に挙げた「フレイベル批判」において、幼稚園が伝統的フレイベル主義から脱却したからには、「教育の他の分野と共通の地盤をもち、より広い世界に生きること」が重要であることを強調し、「小学校と一しよになつて、幼稚園はその最善のスビリットを小学校にふきこむことが出来るだろう。かくて孤立性を失なうことによつて、フレイベルの幼稚園はもっと豊かに生きつづけるであろう。」と結んでいる。幼稚園教育はフレイベル以来、善きにつけ悪しきにつけ、又制度上も理論上も独自の分野として発達してきた。しかし発達しつづつある子ども的一段階を抜かうという点では、幼児を他の年令の児童と全く異つたものとして見ることができないことは、すでにフレイベル自身も論じている所であり、他の教育の分野と違つた地盤の上に立つものではないことは自明のことである。幼稚園教育には、幼稚園の原理

があるのではなく、教育一般の中の幼児教育の位置を占めるものに他ならない。幼児としての教育の原理が成立するのである。ただ、それだからと云って、幼稚園は小学校に準じ、小学校にならえばよいかと云えば、そうでないこともすでに明らかであろう。キルパトリックが「幼稚園はその最善のスピリットを小学校に吹きこむであろう」と云っているように、フレーベルの教育改革におけるスピリット、幼稚園草創期における、又十九世紀末の幼稚園改革運動にけるスピリットは教育全般に通ずるものである。吉い形の小学校に屈従するのではなく、個人個人の子どもを尊重し、その発達に従い、彼らの自発活動、自己表現活動を推進して、新しい形の学校を形成してゆこうとするところに、十九世紀末の幼稚園教育改革運動の重要な意義があったのである。

私どもはここで幼稚園の歴史における、最大の峠をのりこえた。これから先の幼稚園の歴史は、むしろいかにして幼稚園が「孤立性を失ってゆくか」という過程である。最大の難関をのりこえたが、今まで述べてきたところでは、まだ幼稚園がいかにして一般教育の中に統合されてゆくか、伝統的幼稚園主義は破られたが、それに代る新しい教育の道がどのようなものであるか、ということについては殆ど触れなかった。「フレーベルの幼稚園がもっと豊かに生きつづける」ことを望みながら、その後の発展をもう少し辿ってみようとする

るのであるが、その前にここで少しく我が国及びその他の国の幼稚園界においては、伝統的フレーベル主義と教育改革運動とがどのような関係に立って進展したかを、簡単にうかがってみよう。

日本における幼稚園も周知のように、フレーベルの幼稚園のあとをひき、草創の当時よりフレーベル式恩物及び手技から始まったのであった。恩物及び手技は少なくとも明治時代を通じて、つまり一九一〇年頃までは一般的であったようである。そして、少なくともその間を通じて、米国に見られたような、「進歩派」と「保守派」の鋭い対立はなかったし、極立った改革運動も見られなかった。しかし明治の末年から大正初年にかけて、上に述べたような米国における幼稚園改革運動の影響もうけたのであろう、幼稚園に次第に自由な形が加えられていった。その間、新しい幼稚園教育の樹立のために、大きな功績のあったのは、倉橋惣三氏であった。けれども、新しい幼稚園教育の進展に当って、米国における伝統的フレーベル主義と進歩主義教育との間に見られたような激しい対決は、我が国の場合には見られなかったと云えよう。少なくとも、表面上には大して葛藤も論争もなく、恩物は徐々に幼稚園の実際から姿を消していった。もちろん、その過程においては、多くの勇敢な実務家たちが、参考書もなしに新しい工夫をつづけられてきた功績は大きいのである。

るが。

こうして我が国の幼稚園界においては、保守派と進歩派の理論上、また実際上の大きな対立なくして恩物がすてられ、幼稚園の実際が変化していったのであるが、それだけに新しい幼稚園の教育法が必ずしも確立しなかったということができよう。そして、制度上、理論上も、幼稚園の「孤立化」は解消しなかったと云うことができよう。

「保守派」と「進歩派」の極立った対立がなくて、徐々に幼稚園の中に新教育が進展していった点は、英国も我が国と似通った事情を示している。英国においても、一九〇〇年頃までは、幼稚園は専らフレイベル主義によって運営され、恩物が教材の中心をなしていたが、二十世紀に入ってから米国におけるフレイベル批判の波に刺戟されて、恩物は次第に廃止され、新しい教育へと変っていったのである。米国から進歩主義教育を輸入し、紹介し、英国における進歩主義教育を樹立したのは、フィンドレー女史である。(註三)

英国の場合に、日本と異なる点は、「進歩主義幼稚園」が導入されて、恩物が消えてゆくとともに、幼稚園の孤立化は消滅していった、他の教育系統と有機的な連関を示すようになったことである。ただし、これは英国においてはフレイベル主義の敗北とみなされたのではなかった。フレイベルの恩物理論をすてることは、文字の上ではフレイベルの重要性が

減じたように見えるけれども、それは根本的にはフレイベルの精神によりよく近づくことなのである。真の意味でのフレイベル主義は、恩物の窮屈な世界から脱け出すことによつて、真価を発揮することができる。恩物を脱してもとの暗誦的、主知主義にもどるのではなく、子どもの発達、自発活動、要求、子どもの生活に沿つてその上にたてられた近代の教育理論の結論は、フレイベルの精神に全く合致するものと考えられる。したがつて、真のフレイベル主義は、幼稚園にだけ通用するものではなく、幼稚園の専有すべきものでもない。それは小学校、中学校の教育を通して実現されるべきものである。英国ではフレイベル主義はこのように解釈され、小学校の教育に影響を及ぼし、そして幼稚園と小中学校とは共通の地盤に立つようになったのである。(註四)

こうして、フレイベルの批判は、米国において最もはなやかに展開され、日本においても英国においても、変革の気運は醸成されていたにせよ、米国から直接的な影響を受けて幼稚園が改革されてきたのであった。

すべての人は、子どもでも、一人の人間として尊敬され、それにふさわしくとり扱われなければならない、というのが時代を通じてかわることないフレイベルの基本的理念である。この点において、フレイベルは現代的意義をもちつづけている。たとえフレイベルの名は忘れられることがあつて

第九回日本保育学会大会おしらせ

期日 5月26日(土) 27日(日)

会場 長野県諏訪市二葉高等学校講堂
(中央線上諏訪駅下車)

プログラム

- [26日] 午後1時30分—5時30分……研究発表
[27日] 午前8時30分—12時00分……研究発表
午後1時00分—3時30分……シンポジウム

○シンポジウムについて

題 「幼児の創造性をどの様にして培うか」

講師 (発言者) 早川元二 久保貞次郎 鈴木鎮一

(質問者) 加藤清子 高橋さやか 秋田美子
(イロハ順)

○宿泊について

御希望の方には1泊800円にてお世話致します
予約金200円を添えて5月10日までに
長野県諏訪市長野県立保育専門学院内
日本保育学会第九回大会準備委員会まで御申込み下
さい (予約金はお返し出来ませんから御承知下さい)

○汽車の時間について

(一番便利な汽車の時間)

新宿発(準急)	8時10分—上諏訪着	12時36分
新宿発	6時30分— ”	12時13分
名古屋発	5時40分— ”	12時40分
長野発(準急)	8時45分— ”	12時14分
長野発	6時15分— ”	10時07分

事務連絡先 長野県諏訪市長野県立保育専門学院内
日本保育学会第九回準備委員会

も、この基本的理念が教育に対してもつ意義は忘れられないであろう。フリーベルのこの理念は、新教育の進展の中に実現しようとして試みられてきた。けれどもまだじゅうぶんに実現されたとは云えないであろう。彼の課題はなお探究の途上にあるのである。

註1 International Kindergarten Union (Ed.): The Kinder-

註二 garten. Report by Blows, and Harrison. 1925.
Kilpatrick, W. H.: Froebel's Kindergarten Principles.
Critically Examined. 1916
註三 Lawrence, E. (Ed.): Friedrich Froebel and English
Education. Univ. London Press. 1952
註四 op. cit. Chapt. II. History of the Froebel Movement
in England. by P. Woodham-Smith